

「愛知県豊田市旧小原村方言の証拠性を表す形式 -(i)jor について」

高見あずさ TAKAMI Azusa

(東京外国語大学大学院)

E-mail: japaka_az@hotmail.co.jp

1. 序論

本研究では、愛知県豊田市旧小原村¹地域の方言(以下、小原方言とする)において用言複合体を形成する-(i)jorについて、現地調査で得たデータに基づいて次の2点を明らかにする。すなわち、① -(i)jor に後接するテンス形式(-r)u / -(i)ta²によって、-(i)jor が用いられる文の主語人称制限に差が生じることと、②小原方言の -(i)jor が evidentiality (Aikhenvald 2004 以下、証拠性とする)を表す形式であり、後接するテンス形式によって証拠性の意味的制限が異なることである。

本研究の対象である小原方言は、愛知県豊田市北部で話されている。調査地とした大ヶ藏連(おおがぞれ)は、旧小原村の集落のうち最北部に位置し、愛知県西三河地域と岐阜県東美濃地域とが隣接する地帯の愛知県側にある小さな集落である。研究方法としては、現地で収集した自然談話のテキストをもとに、-(i)jor について形態統語的および意味的な観点から考察する。当方言の話者の内省や面接調査による確認のみではなく、一定量のテキストデータから -(i)jor の用例を観察することによって、より客観的な記述を行う。

本稿では、まず2節で -(i)jor に相当する形式がこれまでどのようなものであるとされてきたかを、先行研究の記述から確認する。3節では、本研究で行った調査方法について簡潔にまとめ、つづく4節で当方言における -(i)jor のふるまいを検討する。なお、各方言形式の表記は先行研究の記述に従い、本研究のデータから得られた用例については、簡易音韻表記で示す。

2. 先行研究の検討

本研究でとりあげる -(i)jor は、形態統語的にも意味的にも、西日本諸方言におけるアスペクト形式として研究されてきた「ヨル」³に相当するものと考え。「ヨル」に関してはこれまでも日本各地で調査・研究されてきており、井上(1998)や工藤編(2004)などをはじめとする多大な蓄積がある。しかし、丹羽(2005, 2012)や津田(2008)などのいくつかの論考では、「ヨル」はアスペクトという文法範疇のみでは扱いきれないことが指摘されている。

本節では、愛知県および岐阜県で話される方言における「ヨル/ヨッタ」の特徴を詳細に記述した丹羽(2005)を検討する。丹羽(2005)は、これまで西日本諸方言を中心に「トル」と「ヨル」の対立によってアスペクトという概念で捉えられてきたことをふまえ、岐阜・愛知県の方言における「トル」と「ヨル」については、別の解釈をしなければならないと指摘している。

まず、丹羽(2005)は統語的な観点から、「トル」と「ヨル」は、範列的(paradigmatic)関係をなしているのではなく、前後の形式として統語的(syntagmatic)関係にあると述べている。具体的には、「トル」と「ヨル」が1個の述語の中で共起することを指摘し、以下のような例を挙げて説明している。

- a. ヒトガ ナランドッタ
- b. ヒトガ ナラビョーッタ
- c. ヒトガ ナランドリョーッタ

(丹羽 2005: 83)

¹ 2005年に愛知県豊田市に編入合併した。2012年4月1日現在の人口は約4100人である。

² この形式がテンスの専属形式であるかどうかの議論は、ここでは行わない。

³ ここでは、異形態を含めすべて「ヨル」で代表させる。

aは、人の行列が既に出来上がった状態にあったことを述べており、一般には完了と言われる。bは、人が次々に並び、行列が出来ていく途中の有様を述べており、進行と言われる。このような見方は他の方言の例で述べられていることと同じである。それに対してcは、行列が既に出来ているという実現状態があり、そういう状態を繰り返し、あるいは習慣的に目撃したという話し手の回想の表現、つまり「あそこへ行くといつも人の行列が出来ていたものだ」という意味である。この共起の場合、無理な場面を想定すればナランドリョールも使えるが、タの接続した回想の形で使われることが多い(丹羽 2005: 83-84 を要約)。

丹羽(2012)は、上記のような「トル+ヨル」の共起が見過ごされてきたのは、「談話資料などからデータを集めるのではなく、意味を基準として、単独使用を前提とした質問文によって例文を集めてきたからである(丹羽 2012: 198)」と主張している。さらに「この方法でも意味の相違は説明できるし、アスペクトという概念を知っている人には分かり易いかもしれない。しかし「意味の対立に形式をあてはめる」という非記述的な方法に頼っているのは、トルやヨルの持つ本質的な特徴や日本語の派生動詞を構成する論理を見落とすことになる(丹羽 2012: 198)」という。

この他にも丹羽(2005)は、特に述語を形成する他の形式との共起関係や承接順序に重点を置き、「トル」と「ヨル」の違いを綿密に調査している。さらに丹羽(2005)は、意味的な観点から「ヨルは、話し手が目前でその現象を目撃・経験していることを表している。それをアスペクトの側から見れば、進行ということになるが、本来の意味は、現場での目撃や経験という、話し手の主観的判断を表している(丹羽 2005: 95 を一部要約)」と述べている。また「ヨル+タ」の形式である「ヨッタ」は、「ヨル」の本来の意味である目撃・経験をしたことについて回想する場合に用いられるという。

丹羽(2005)では、岐阜県土岐市、愛知県犬山市、愛知県江南市の3地点の方言を資料として「ヨル/ヨッタ」の考察を行っている。本研究の対象である小原方言が話される地域は、丹羽(2005)が対象とした地域のうち、岐阜県土岐市と隣接する。本研究では、丹羽(2005)を地理的に近い方言の詳細な記述として重要なものと考えており、小原方言における-(i)jorについても類似した振る舞いが認められるだろうと予測する。ただし、丹羽(2005)で挙げられている「ヨル/ヨッタ」の用例については、それぞれの例がこれら3地点のどの方言のものであるのか不明である。

本研究においても、丹羽(2012)の言うように、談話テキストから一定量のデータを収集し、より客観的に方言を記述する必要があると考えている。本稿では、3節で詳細を述べる調査方法を用いて、当方言における-(i)jorを新たな視点から観察することを試みる。

3. 研究方法

本研究は、現地調査で収集した談話録音データおよび面接調査によるデータをもとに行った。したがって、例文はすべて現地調査において得られたものである。現地調査は、愛知県豊田市大ヶ藏連町で行い、談話の録音および面接調査は表2に示した話者Bの自宅で行った。計2回の現地調査を通して話者A, B, C以外にも協力者はいたが、年齢・集落などを考慮した結果、本研究のデータとしては扱わないこととしたため、表2では情報を割愛した。

自然談話の録音については、許可をとったうえで、特に話題は指定せず自由に会話してもらった。録音した音声はELANを用いてテキストに書き起こし、文法的な分析を行ってグロスや標準語訳を付した。調査者自身は、小原方言の母語話者ではないため、音声からテキストを作成するにあたり特に意味的な解釈の面で問題となる点があくつかあった。これについては、話者Cに協力してもらって、できる限り正確に記述するように努めた。書き起こしに協力してもらった際に、話者Cによって自発的に発話された例文についても、面接調査で得た作例と同様にデータとして扱うことを断っておく。

調査の概要およびインフォーマントの情報は以下のとおりである。

表 1: 現地調査の概要

	期間	調査内容
第 1 回	2010/08/8-10	自然談話録音 (計 8 時間程度)
第 2 回	2012/11/7-20	自然談話録音 (計 14 時間程度) 面接調査

表 2: インフォーマント情報

		生年	職業
A	女性	1918(大正 7)年生	農業・主婦
B	女性	1922(大正 11)年生	農業・主婦
C	男性	1948(昭和 23)年生	農林業・和紙職人

4. 結果

2 節で述べたように、丹羽(2005)は、「ヨル／ヨッタ」の本来の意味は「目撃・経験」であるとした。4 節では、本研究の対象である小原方言においても *-(i)jor* がそのような意味を担っているか、丹羽(2005)では述べられていない文法的な事実が新たに確認できるかを検討する。その際、談話テキストから当形式の用例を収集し観察することによって、これまでの研究とは異なる視点から分析した。具体的には、*-(i)jor* に後接するテンスや主語の人称に着目した。結果的に、観察できた事実として、以下の 2 点が挙げられる。

- ◆ *-(i)jor* が非過去テンス *-(r)u* を後接する場合、その文の主語として一人称を用いることはできない
- ◆ *-(i)jor* が過去テンス *-(i)ta* を後接する場合、主語の人称制限はなくなる

-(i)jor とそれに後接するテンスとの関わりや、*-(i)jor* が表れる文の人称については、管見の及ぶ限りどの研究においても検討されていない。

本研究の談話テキストデータに表れた *-(i)jor* の用例を見ると、その圧倒的多数が(1)、(2)のような 3 人称主語の文であり、*-(i)jor* に後接するテンス形式は過去の *-(i)ta* だった。なお、本研究は *-(i)jor* の文法機能を検討するものであるため、例文における *-(i)jor* のグロスには、未確定の意味で「??」を用いる。

- (1) *kodzjro:sawa ifae ikijotta*
kodzjro:-sa=wa ifa=e ik-ijor-ita
 小次郎-HON=SBJ 医者=DIR 行く-??-PST
 「小次郎は医者へ(よく)行ったものだ」

- (2) *tanuki demo orijottakendomo orjahenjo:ni nattaifi*
tanuki=demo or-ijor-ita=kendomo or-jahen=jo:=ni nar-ita=fi
 タヌキ=CML いる-??-PST=ADVS いる-NEG=DN=DAT なる-PST=CML
 「タヌキもいたものだけど、いなくなったし…」

談話テキストの中では、3 人称主語の例よりはかなり少ないものの、(3)のような 1 人称を主語とする用例も見られた。

- (3) *jo: taberijottakedo ma: e:*
jo: taber-ijor-ita=kedo ma: e:
 よく 食べる-??-PST=ADVS もう いい
 「(私は昔は)よく食べていたけれど、もういい[=いらぬ]」

上記のように録音した談話データでは、-(i)jor は過去テンス -(i)ta を伴う例ばかりだった。しかし、調査中の話者との生活においては、非過去テンス -(r)u と共起する例も耳にしたため、面接調査を行って確認した。話者には、-(i)joru を使った文を自由な状況設定で作例してもらった。

- (4) *tanukiga muko:kara kijoruga*
tanuki=ga muko:=kara k-ijor-u=ga
 たぬき=NOM むこう=ABL 来る-??-NPST=SEP
 「(たぬきが近づいてくるのを見ながら)たぬきがむこうから来るよ！」

- (5) *ju:binjasanga to:rijoru*
ju:binjasaN=ga to:i-ijor-u
 郵便屋さん=NOM 通る-??-NPST
 「郵便さんが(目の前を)通っていくよ」

(4), (5)以外にも作例をしてもらったが、いずれの例も3人称主語の文だったため、さらに、3人称以外を主語とした用法は可能かどうかを確認した。話者BとCに、1人称主語の例文(6)および2人称主語の例文(7)を提示したが、いずれも言えないと答えた。

- (6) **ora: ifae ikjo:ru*
**ore=wa ifa=e ik-ijor-u*
 *1.SG=SBJ 医者=DIR 行く-??-NPST
 「(道で出会った人にどこへ行くか尋ねられた場合の答えとして)私は医者へ行くところだ」

- (7) **omae: ifae ikjo:ru daka*
**omae=wa ifa=e ik-ijor-u da=ka*
 *2.SG=SBJ 医者=DIR 行く-??-NPST COP=Q
 「(毎日医者へ行くことを知っている人に会って)あなたは医者へ行くところなのか」

面接調査の中で、話者BおよびCは「(その状況を)見ているときにしか言えない」と強く主張した。さらに(8)を作例したうえで、「自分が目にしているものをだれかに言うときに使う」と話者Cが説明した。

- (8) *hore ba:sanga ifae ikjo:ru*
hore ba:san=ga ifa=e ik-ijor-u
 ほら おばあさん=NOM 医者=DIR 行く-??-NPST
 「ほら(見ろ)、おばあさんが医者へ行くところだ」

談話テキストから得たデータと、面接調査での作例および話者の内省を併せ考えると、-(i)jor が非過去テンス形式 -(r)u と接続した場合には、3人称のみが主語になることができ、1人称と2人称は主語になれないことがわかる。一方で、(1)~(3)の例文で示したように、-(i)jor が過去テンスの -(i)ta と接続した場合には、そのような人称制限はなくなる。上述しなかった2人称の用例としては、以下の(9)のようなものがある。

(9) *to:ban da nanfa: asa ha:jo okite ikijottaga*
to:ban da nanfa: asa ha:jo oki-te ik-ijor-ita=ga
 当番 COP なんて言っは 朝 早く 起きる-ADV 行く-??-PST=SEP

「(おまえは子供の時)当番だなんて言っは、朝早く起きて(学校へ)行ったものじゃないか」

ここまでの確認できた *-(i)jor* に後接するテンス形式と主語人称制限との関係を以下の表 3 に示す。

表 3: 主語の人称制限

	1 人称	2 人称	3 人称
<i>-(i)joru</i> 非過去	×	×	○
<i>-(i)jotta</i> 過去	○	○	○

では、なぜテンスによって主語人称の制限に差が生じるのだろうか。人称制限の観点をふまえ、5 節で *-(i)jor* の意味的な面から一考察を述べる。

5. 考察

-(i)jor が非過去テンス *-(r)u* と接続する場合には、上記の(4), (5), (8)の例のように、発話者が事態を目撃していることが必須となる。談話データでは 3 人称主語文が圧倒的に多く、(6)のような 1 人称主語文では言えない。つまり、発話者=行為者(主語)では *-(i)joru* を用いて現在の状況を描写できないと言える。たしかに、主語と発話者が同一人物である場合には、発話者はそれを「目撃」することは不可能である。丹羽(2005)では、「目撃・経験」をヨル形式の本来的な意味だとしたが、少なくとも小原方言においては、より厳密な意味での「目撃」が必要となるようである。ただし、2 人称が主語の場合には、発話者がそれを目撃することは現実的に可能である。それにもかかわらず 2 人称が主語になれないのは、単に 2 人称の行動を眼前描写するということが通常は行われなためではないだろうか。特殊な状況を設定すれば、2 人称の制約はなくなるかもしれないが、これは今後の課題とする。さらに面接調査で確認したところ、(10)のような 3 人称の行為を習慣的に「目撃」しても「現場での描写」以外の場面では *-(i)jor* は使わないという。

(10) **ba:sanwa fu: ippen ifae ikijoru*
**ba:san=wa fu: ippen ifa=e ik-ijor-u*
 *おばあさん=SBJ 週 一回 医者=DIR 行く-??-NPST
 「おばあさんは一週間に 1 回医者へ行っている」

以上のことから、非過去テンスを伴う *-(i)jor* については、その人称制限から考えて「経験」というよりも「現場で目撃したものを描写する」ことに特化した用法を持つという仮説が立てられる。

さらに談話テキストの例を見ると、*-(i)jor* が過去テンスと共起した場合には、主語人称だけではなく証拠性の面でも制限が弱くなることがわかる。すなわち、現場での目撃が必須ではなくなり、目撃以外を情報源とした場合にも *-(i)jor* が用いられるようになる。その例を以下に示す。

(11) *ifimanen fotto jarijo.tagena*
ifimanen fotto jar-ijor-ita=gena
 一万円 少し あげる-??-PST=INFR
 「(話者 B の友人が)一万円ちょっと(御礼に)あげたようだ」

(11)は、発話者が目撃も経験もしていない例である。文末に現れる当方言の *gena* は、伝聞と推量の両方を表す機能を持つため、(11)が述べられた情報源を正確に把握することはできなかったが、非過去テンス *-(ru)* と共起した場合ほどは情報源に関する制限が強くないと言えるだろう。

以上に述べたように、後接するテンスが非過去か過去かによって、*-(i)jor* が現れる文の主語人称と情報源の制約に差がみられることがわかった。つまり、非過去 *-(i)joru* の場合には、1人称主語は用いられず、「目撃」が必須であり「現場での状況描写」でのみ用いられるようである。一方、過去の *-(i)jotta* 場合には、すべての人称が主語になることができ、「目撃」は必ずしも要求されるものではないことがわかった。

6. 結論

本研究では、愛知県と岐阜県の両方言の接触地域である小原方言における *-(i)jor* について、現地調査での録音資料から作成したデータを用いて記述を行った。これまで「トル」との対立によって論じられる傾向にあった「ヨル」に相当する形式を扱ったが、本研究では、新たな記述の観点として *-(i)jor* に後接するテンスの違いに着眼し、「ヨル(*-(i)joru*)」と「ヨッタ(*-(i)jotta*)」の対立として分析を行った。その結果、*-(i)jor* に後接するテンス形式(*-(ru)* / *-(i)ta*)によって、人称および証拠性の意味的な面において異なる振る舞いをすることを確認した。小原方言において、*-(i)jor* に非過去テンス *-(ru)* が後接する場合、その文の主語には3人称しか用いることができない。これは「現場で目撃したものを描写すること」を必須とすることに起因すると考えられる。反対に、過去テンス *-(i)ta* が後接する場合には、人称制限はなくなり、「現場での目撃・経験」が情報源である必要がなくなる。

今後は、本稿で「??」を用いて示した *-(i)jor* の機能について、どのようなラベリングをするのが妥当であるか、さらにデータを見ながら検討していく。

略号一覧

1.	first person	1人称	INFR	inferred	推量
2.	second person	2人称	NEG	negative	否定
ADVF	adverbial verb form	副動詞形	NOM	nominative	主格
ADVS	adversative	逆接	NPST	non past	非過去
CML	cumulative	累加	PST	past	過去
DAT	dative	与格	Q	question marker	疑問文標示
DIR	directive	方向格	SBJ	subject	主語
DN	dummy noun	形式名詞	SEP	sentence-ending particle	終助詞
HON	honorific	敬称	SG	singular	単数

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004 *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- 井上文字(1988)『日本語方言アスペクトの動態 存在型表現形式に焦点をあてて』東京: 秋山書店.
- 工藤真由美編(2004)『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系—標準語研究を超えて—』東京: ひつじ書房.
- 津田智史(2008)「西日本諸方言アスペクトの捉え方—宮崎県方言を例にして—」『言語科学論集』12: 49-60, 東北大学大学院文学研究科言語科学専攻.
- 丹羽一彌(2005)『日本語動詞述語の構造』東京: 笠間書院.
- 丹羽一彌(2012)「10 印欧語の文法範疇と日本語の接辞」丹羽一彌編『日本語はどのような膠着語か、用言複合体の研究』東京: 笠間書院.